

臨床倫理メデイエーション

国立大学法人山形大学医学部
総合医学教育センター

准教授 中西 淑美

65 ハビトウスとは何か

はじめに

人間の行為について、「ハビトウス」という概念を提唱し確立したのは、社会学者のピエール・ブルデューの研究からと言われている¹⁾。

「ハビトウス」とは、「日常生活の認知、評価、行為を方向付ける性向 (dispositions) のシステム」をいう²⁾。もともと、「ハビトウス」は社会学や哲学に長い歴史のある概念であると言われている。前回述べた、感染予防以外の理由による、マスクの習慣化が、いきなり、ハビトウスになるわけではないが、ハビトウスが、差別や偏見の原因の影響に与える可能性はある。

本稿では、人間の行為を考えるにあたって、

興味深いハビトウスという概念について述べることにする。

1. ハビトウスとは何か

「ハビトウス」という語は、ラテン語が語源の「habitus」で「習慣」という意味で、「存在のあり方」ともいう。「ハビトウス」とはイタリアのスコラ哲学者であるトマス・アクィナスが提唱した概念で、「行為によって身に着けた習慣」という意味で、ハビトウスは知性、学知、英知、分別、正義、剛毅、節制などから構成されている。これらは、「態度」「性質」という意味もあり、この言葉は後に英語で「習慣」や「癖」を意味する「habit」へと派生していった。前

述のアクィナスによると、人とは元々、善い行いをするために考えたり行動したりするものであるが、それは、情念とハビトウスが原理になっているといわれている³⁾。情念とは心に抱く感情や思念のことで、情念とハビトウスが一緒になって人を善行へと導くという行動心理である。また、「ハビトウス」は、ギリシャ語の概念である「ヘクシス」のラテン語訳でもある。「ヘクシス」はアリストテレスの『ニコマコス倫理学』の主題である。その『ニコマコス倫理学』の中でアリストテレスは、「いかなる技術、いかなる研究も、同じくまた、いかなる実践や選択も、ことごとく何らかの善(アガトシ)を希求していると考えられる」と述べ、「魂において生まれるところのものとして、情念(パトス)、能力(デュナミス)、状態(ヘクシス)の三つが区別できるのであってみれば、徳(アレテー)はこのうちのいずれかなくてはならない」としている⁴⁾。また、ヘクシスは状態であり、状態(ヘクシス)とは、「われわれが情念への関係においてあしくふるまうところのもの」を指すとする。あしくとは悪しくとも考えられるが、その情念との関係で、よき状態とも考えられるという。

このように、西欧の社会思想の一つの用語と

して、「ハビトゥス」は、西欧社会の中で息づいてきたともいえる。

まず、ブルデューのハビトゥス概念を紹介する前に、その基礎となった、人類学者のモースの研究から、モースの考える「ハビトゥス」を紹介する。

モースは、「社会的に習得された身体技法の型」をハビトゥスと呼び、日常生活における歩き方や食事の仕方、休憩時の姿勢などで、人間には固有の身体技法があると提示した。たとえば、フランス軍の兵隊の歩き方とイギリス軍の兵隊の歩き方は異なり、歩き方一つをとってみても人間は異なる歩き方をしているとした⁴⁾。単純に、それぞれの軍隊が異なる歩調で行進しているのではなく、人間の行為は、社会的に習得されて、一度身に着的いた技法や振る舞いは癖となる。モースは、その身体的な振る舞いは、各社会で構築された、道徳や文化背景の中で、良しとされる行進のあり方を個人が倣い、行進のあり方や歩き方について後天的に学習して身体にしみついた「ハビトゥス」だとしたのである。つまり、生まれつきの軀幹の姿勢や体勢が違うから異なる歩調で行進しているのではなく、そのような身体技法がモースのいうハビトゥスである。

それは、社会的に習得されて、一度身についてきた技法は癖となるとして、食事の仕方、休憩の取り方、人への接し方など、他の身体技法の例も提示している。

フランスの社会学者ピエール・ブルデューは、モースのハビトゥスを発展させた。ブルデュー以前の社会学では、人間の行為を主観的に説明するのに対し、人間の行為の目的をまず描いてから、その実現に向けて手段を用いるという意味で、ハビトゥスを捉えなおしたのである。

ブルデューによると、ハビトゥスが最も身近に感じられるのが「階級のハビトゥス」であり、「階級のハビトゥス」は、同じ階級にある人同士、または生活条件が似ている人同士で作られる集団で共有されるハビトゥスのことである。階級のハビトゥスの例としては、貴族社会での振る舞いが挙げられよう。たとえば、中世の貴族社会における貴族の持ち物と平民の持ち物は異なる。ハンカチーフの持ち方、装飾品、趣味、それらは、主観的な行為が目的や手段ではなく、むしろ、ブルデューは、目的や手段は過去の蓄積から生まれ、自然発生的ではなく、目的と手段には資本という同一の要因があるとした。この「階級のハビトゥス」は私たちの生活の

基礎に関わり、将来的にも影響すると考えられている。ある社会における女性や中産階級の人びとのハビトゥスは、その社会の性差や階級構造によって作り出され、教育や社会構造にも影響する。

ブルデューは「日常生活の認知、評価、行為」をブラクティス（または慣習的行為）と呼んだ⁶⁾。ブラクティスとは、日常生活における立ち振る舞い、会話、食事、政治的判断といったあらゆる領域で人が慣習的にこなしている認知、評価、行為を包括する概念である。そして、ブラクティスが、われわれが生きていく上でのハビトゥスを創り、循環して社会的性向となる。つまり、ブラクティスを方向付ける性向のシステムがハビトゥスである、とブルデューは定義した。ブルデューによる「ハビトゥス」とは、「人の知覚と行動に影響を与える体系的な性向の仕組み」を意味する。

たとえば、子どもが初めて歩くとき、①「子どもは歩き方を言葉で教わらなくても身体で覚えていくように、行為者は実践のなかで身につけることができる」し、身体知とも評されるように、②「当事者は一度身についたら、指摘されるまで気づかない実践の性向がある（無意識

的な実践」し、③「趣味や政治的意見は個人の自由な意思決定ではなく、身体にしみついた社会的傾向によるものである」とする²⁾。

このように、ハビトゥス概念の特徴は、「行為者」と「構造」が関わった概念である。それをブルデューは「構造化された構造」と「構造化する構造」で上記の例のように説明しているのである。

2. 社会構造と文化資本

前述の階級のハビトゥスのように、社会構造によってハビトゥスは条件づけられる。

ハビトゥスの一般的な例として、①言語を学ぶこと、②社会での振る舞いや会話の仕方を学ぶことなどがある。身体的な傾向の中に、それぞれの行為や行動の仕方が社会的に内在化しており、ハビトゥスは社会構造の内部で形作られていくのである。

ブルデューは、ハビトゥスとは、過去の体験から習得された傾向であり、つまり、身体的、知覚、思考、行為はハビトゥスによって方向付けられているとした。これは、われわれ主体がさまざまな情報を収集・判断して、行為を決定するわけではなく、無意識に、人間の行為は、

自動化した傾向をベースとするといった特徴をもつということである。

対話の場面で言えば、ハビトゥスは言葉、身振り、表情、動作となつてあらわれて、目の前にいる相手とのやり取りの反応や方向性をも変える可能性があるともいえる。

ハビトゥスが過去の体験から習得された体系的な傾向であるとする、それらが文化的な価値としてあらわれたものが「文化資本」といわれるものである。たとえば、文化資本には、学歴や医師・看護師の免許といった資格を意味し、言い換えると、文化資本とはこれまでに取得した知識や能力が社会的に認知された過去の履歴として通用してきたことを意味する。文化資本が資本であるのは、獲得した履歴が一定の地位や収入を保証するためであるし、学校で学んでつけた知識や教養や家庭で習得した嫉や価値観などは、自分の将来を決める基礎となっていることから派生しているためでもある。

ハビトゥスという概念について、ブルデューが明らかにしたのは、社会的行為は、個人の主観が自分の頭に描いた目的を遂行する世界ではないことを指摘したことである。社会的行為とは、ごくごく日常の生活における立ち振る舞い

などの行動であったということが、ブルデューの研究で、明らかになったのである。

3. ハビトゥスの構築とは

ハビトゥスはどうやって身につけるのか。岸は、「それまでの人生における有限の体験の中で構築され、その後の人生の様々な状況のなかで応用が可能な規則性・傾向性の束がハビトゥスである」とする³⁾。ブルデューは、社会的関係の中でつくられ、その人のパーソナリティは関係なく、あくまでも人々の相互行為の中で、社会的・歴史的に構築されるのがハビトゥスであると述べている。ハビトゥスが構築される具体的な場所は、家庭と学校や身近な地域社会である。

ブルデューは、この場所の違いによって、ハビトゥスは変わってくると指摘している。たとえば、同じ「高級文化嗜好」というハビトゥスでも、家庭の中で小さいときから自然に身につく上流階級のハビトゥスと、学校で教えられ自ら努力して身につけた中産階級でのハビトゥスは異なるという。家庭の中で自然に身につく身体的なハビトゥスと、学校の中で意識的に培われて身につくハビトゥスはある種の禁欲的な規範として社会的なハビトゥスといった違い

も作用する。

さて、ブルデューは、ハビトゥスの形成に、家庭や学校が大きな役割を果たしているとしても、それがその人の人生において固定化されるとは全く言っていない。希望のない決定論ではない。なぜなら、人々の社会が、農村社会から近代的な工業社会と変化した際、ハビトゥスは多様に獲得されたからである⁽⁷⁾。つまり、ハビトゥスは、人と社会において、貨幣や契約という関係性や、将来への希望や期待・予想の違い、雇用や体制における態度や能力の変容によって、個々に取り込まれた形で引き起こされて変容するからである。

ハビトゥスとは、ひとりの人間の人生において、社会全体の変動や歴史の繰り返しのおかげで、常に変化や組み換えをしつつ、構築形成され、分類し分類されていく社会的機能の概念の一つでもあるといえよう。

ハビトゥスは、それまでに蓄積された履歴の傾向、態度といった認知と行為の傾向性であるとともに、学習と訓練によって獲得されたもので、相互行為の中で育まれる。

現代社会は、複雑で多様化するハビトゥスの時代である。ハビトゥスにある他者の合理性を

受容し合い、その人の日常的な営みを理解し合うことは、明日の社会のつながりを形成していくと考えられる。

おわりに

ハビトゥスとは「行為者」と「構造」が関わった概念であり、「構造化された構造」と「構造化する構造」によって構成される。また、人間の行為は、半ば自動化した性向をベースとし、過去の体験から習得された性向であるハビトゥスが文化的な価値としてあらわれたものは「文化資本」と呼ばれることを、ハビトゥスとプラクティスの関係もふまえて紹介した。

パンデミックから始まった感染予防のための我々の生活様式の変容は、主観的な単なる習慣化でおわるのか、このハビトゥス概念でいえば、どのように社会構造の中で、無意識に、「文化資本」として発展するのか、あるいは、それが善なるものとして、人間の行為として身体的な傾向としてプラクティスにつながっていくのか、今は未知である。

現代の複雑多様化する社会では、医療の現場やさまざまな現場でのハビトゥスについて、「文化資本」として検討してもよいのかもしれない。✖

参考文献

- (1) ピエール・ブルデュー(著)、石井洋二郎(訳)『ディスタンクシオン(1)―社会的判断力批判ブルデューライブラリー、藤原書店、1990』
- (2) <https://liberal-arts-guide.com/habitus/> (アクセス2023年6月1日)
- (3) アリストテレス(著)、高田三郎訳・ニコマコス倫理学(アリストテレス)上、岩波文庫、1971、66―67頁より一部引用
- (4) マルセル・モース(著)、有地亨 佐藤昌司 訳『社会学と人類学1、弘文堂、1973』
- (5) <https://biztrans-suite.jp/88196> (アクセス2023年6月1日)
- (6) 岸政彦(著)『ブルデュー「ディスタンクシオン」2020年12月(NHK100分de名著) NHK出版、2020』
- (7) ピエール・ブルデュー(著)、原山哲(訳)『資本主義のハビトゥス―アルジェリアの矛盾(ブルデュー・ライブラリー)、藤原書店、1992』